

哲学分野

新たな対話的探求の論理の構築

研究班代表

片柳 榮一

はじめに

片柳 榮一

研究会「新たな対話的探求の論理の構築」は、一元化と多元化とが同時進行する現代世界の軋みの中で、同一性に還元されない異他的なるもの共同の在り方をその根源に遡って探ることを課題としている。研究会の中で中心的に論じられてきたのは、「異他的なるものが向き合う場」をめぐるものだ。

最初の論文「同一性と差違性の新たな理解を求めて」は、イギリスの歴史哲学者コリングウッドによりながら、自己を中心ににおいて世界を見渡そうとするモナドとして人間が、同じく自らを中心として自己を主張する他者と共なる共同の世界に如何に立ちうるかを問題とする。その解決の方向として、自らを中心として歴史的パースペクティブを抱くモナド的人間それ自身の現在が、歴史の中で一つの限定された場を占める相対なものであることを徹底して自覚し、様々なパースペクティブが並び立つ「歴史」の場へ超出することが目指される。

次の「証言から歴史へ」は、同じく「歴史」を問題とする。しかしここでは歴史が常に勝利し生き残った者によって編まれたものであり、敗れて死んでいった者たちを覆い隠す作業であることが問題とされる。こうした勝者の「歴史」への不信は、勝者の抹殺を辛うじて免れた「証人」に赴かせる。ここでは客観的確認に訴えることはできない。歴史の不確実な闇と隠蔽の中で、証人を信じる冒険が要請される。証人が指示する他の証人達が立つ薄暗がりの「広がり」が、求められる「歴史」であり、異他的なものが向き合う場であることになる。

「対話の中のわたし」では、他者に向き合う「主体」の生成が問題となる。私という主体が生まれる基盤としての「語り」の現場が探られる。異他的なるものと向き合う「語り」の場において、私は定立され、私として捉え直される。しかしこの定立、捉え直しは、私の喪失、曖昧化でもある。その中で私が語るしかないラングとしての公共性は、「誰でもない私」という空洞を孕んでいる。この固定と喪失の危険を本質的に含

む公共の場を、主体は主体として在るために引き受けねばならないのである。

次の二つの論文は、宗教的寛容を取り上げている。「異他的なるものが向き合う場」という問題意識そのものが、近代の市民社会思想の中核にあった寛容の議論の延長線上にあるからである。「寛容と対話」は、宗教的寛容についての古典的著作であるロックの「寛容論」を現代的視点から吟味している。ロックの寛容の考えが近代市民社会の基礎的枠組みを形成する推進力になったことを認めながらも、現代は、思想的にも社会的にもロック自身が考えもしなかったような多元の様相を呈していることを指摘する。そして寛容思想自身が現代においてイデオロギー的に、強者の弱者への恩恵として作用している面も否定しえないとする。「異他的なものが向き合う場」はそのような危うさと混沌のうちにある。そのような中で新たに求められる寛容と対話は、ディアレクティケー（対話的問答法）としての思索の営みと、自己の世界が徹底して破られる宗教的自覚に基づかねばならないとする。

「信仰に由来する寛容」は、従来のいわば啓蒙主義に由来する寛容が、各自の確信を弱める意味で受けとられ、人を傍観者にする方向に作用し、それに対する反動としての一層の不寛容をファンダメンタリズムという形で生み出しているという反省から出発する。そして我々の課題として、自らの信仰そのものの深化のうちで寛容を生み出してゆくという基本的姿勢を、各自の宗教的伝統のうちに探求することが求められる。自らの独自の根源に還る中で、異他的なるものが向い合いうる場を見いだそうとするのである。

「日本におけるトマス・ヒル・グリーンを受容史から垣間見えるもの」は、英国の自由主義の思想家ヒル・グリーンの本邦における受容の問題点を論じている。グリーンは自由の社会性を前提にし、個人の自由と公共性の両立を目指すものである。しかし日本での受容は、グリーン個人の自由の主張にもっぱら焦点が当てられている。そこには自由を基盤とする公共性を欠いた日本社会そのものの問題性が映し出されている。そしてそれは、「異他的なものが向き合う場」を求める我々の時代も未だ克服しえていない問題である。

これらの論考から、今後の我々の議論の土台として次のような共通認識が得られたと言えよう、つまり自らと異なるものを如何にして我々は

容認しうるかが問題なのではなく、我々自身が自らの異他的個別性を自覚し、そのような他なるものが、そこへと出てゆくべき共同の場は如何なるものであり、如何に形成されるべきであるかが問題なのである。